

SHOW HEY シネマルーム

★★★★

バレリーナ (The World of John Wick)

2025年/アメリカ映画
配給：キノフィルムズ/125分

2025 (令和7) 年8月26日鑑賞

T・ジョイ梅田

Data

2025-79

監督：レン・ワイズマン

出演：アナ・デ・アルマス/アンジ
エリカ・ヒューストン/ガブ
リエル・バーン/カタリー
ナ・サンディノ・モレノ/ノ
ーマン・リーダス/シャロ
ン・ダンカン=ブルースター
/ランス・レディック/デヴ
イッド・カスタニエーダ/ロ
ベルト・マーザー/チェ・ス
ヨン/イアン・マクシェーン
/キアヌ・リーヴス

👁️👁️ みどころ

『バレリーナ』だけでは一瞬「これはバレエ映画？」と思ってしまうが、本作は“ガンフー”で一躍世界を制覇したキアヌ・リーヴス主演の『ジョン・ウィック』シリーズのスピノフ作品の第1弾だ。なるほど、なるほど・・・。

私はチャイコフスキーのバレエ音楽『白鳥の湖』が大好きだが、本作の小道具として再三登場する、その第2幕の第10曲「情景」が流れる中で、クルクルと人形のバレリーナが回るオルゴールは小道具としてどんな役割を？

“美しき殺し屋”の役が似合うのはアンジェリーナ・ジョリー、ユマ・サーマン、ミラ・ジョヴォヴィッチ等だが、本作『ジョン・ウィック』のヒロイン・イヴ役を演じた女優アナ・デ・アルマスの適性は如何に？

『ジョン・ウィック』は既に完成された殺し屋、そして既に引退した殺し屋だが、本作は「殺し屋になりたいと思う人の物語」！タランティーノ監督の『キル・ビル』ばりの日本刀アクションの他、本作のクライマックスとなる教団 (= 主宰) との“大戦争”では、なんと火炎放射器アクションまで登場するので、それに注目！

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■ 『ジョン・ウィック』シリーズの“スピノフ作品”が誕生！ ■□■

伝説の殺し屋ジョン・ウィック。彼の最大の「持ち味」は打撃・投げ・関節技の体術と銃撃を組み合わせた近接戦闘術“ガンフー”だ。2014年に公開され大人気となった同作は当然のようにシリーズ化され、第2作『ジョン・ウィック：チャプター2』（17年）（『シネマ40』未掲載）、第3作『ジョン・ウィック：パラベラム』（19年）（『シネマ46』394頁）、第4作『ジョン・ウィック：コンセクエンズ』（23年）（『シネマ53』55頁）が公開された。同シリーズを楽しむためには、「ルスカ・ロマ」、「コンチネンタル・ホテル」、「主席連合」、

「コイン」等々いくつかのキーワード（約束ゴト）の理解が不可欠だが、それは同シリーズのファンなら周知のとおりだ。

他方、近時のハリウッドでは、人気シリーズが誕生すると、その「スピンオフ」作品が製作されるケースが増えている。Wikipedia には、「派生作品は、作品制作の分野におけるスピンオフによって既存の作品（本編）から派生した作品全般を指す。スピンオフ作品とも。」と解説されている。ちなみに、「マスメディアによって『スピンオフ』という言葉が頻繁に使われ、一般に知られるようになったのは2000年代の半ば以降である。」とのことだ。『バレリーナ (The World of John Wick)』と題された本作はまさにそれ。つまり、本作は第3作に登場した、かつてジョン・ウィックが殺し屋として育てられた犯罪組織ルスカ・ロマで、パレーと殺しのテクニックの特訓を受けたヒロイン、イヴを主人公とした物語で、第3作と第4作の間に起こった物語らしい。

なお、シリーズ4作すべての監督を務めたのはチャド・スタエルスキだが、彼は本作では製作に回っている。したがって、本作はシリーズ4作との関連性に十分注意を払った上で、より充実したアクションを追求しているのだから注目！ちなみに、スピンオフ作品を製作するについては、あくまでスピンオフ作品の主人公に重点を置き、本家の主人公ジョン・ウィックは登場させない作り方もありだが、その点、本作は如何に？

■□■本作のヒロインは？小道具としてのオルゴールに注目！■□■

バレ音楽の最高峰はチャイコフスキーの『白鳥の湖』だが、これを本物の舞台ですべて鑑賞するのは時間的にも費用的にも大変だ。『白鳥の湖』には美しい楽曲がたくさんあるが、最も有名なのは第2幕の第10曲「情景」。したがって、「白鳥の湖」のエッセンスを味わう最も簡便な方法は、『白鳥の湖』の「情景」がセットされたオルゴールのスイッチを入れること。くるくると回る可憐なバレリーナの姿と共に美しい旋律が流れてくるから、たちまち「白鳥の湖」の世界に浸ることができるはずだ。本作導入部では、子供時代のイヴが、謎の男が率いる武装集団によって殺されそうになり、父親とともに逃げ惑いながら一時の安らぎをそんなオルゴールに求める姿が描かれる。

それから12年後、父親を失い身寄りのなくなったイヴ（アナ・デ・アルマス）は、孤児を集めて暗殺者とバレリーナを養成する組織ルスカ・ロマの下で、パレーと暗殺術の厳しい訓練を受けていた。そして、父の復讐に燃え、訓練にあけくれるイヴは、ある日ついに暗殺者としての初仕事を得て、それを首尾よく成功させることに。『007 シリーズ』第25作となる『007 ノー・タイム・トゥ・ダイ』（21年）（『シネマ50』46頁）には、私の大好きなフランス人女優レア・セドゥがボンドガールとして出演していたが、同作でチョイ役として出演していた女優アナ・デ・アルマスが、本作のヒロイン、イヴ役に抜擢されたのは一体なぜ？それは、彼女がバレエと暗殺術の厳しい訓練を受ける姿や、黒いドレス姿で挑む暗殺者としてのデビュー戦の奮闘ぶりをあなた自身が見た上で、しっかり判断してもらいたい。

ちなみに、キネマ旬報9月号は本作を特集しているので、それは本作のパンフとともに必読。その中の「超現実的殺戮スペクタクルを楽しむべき映像アトラクション！」で江戸木純氏（映画評論家、プロデューサー）は、「当初レディ・ガガやクロエ・グレース・モレッツが演じるという噂もあったタイトルロールをアナ・デ・アルマスが体当たりで好演。ちょっと線が細く、感情の喪失を表現するワイズマンの演出か、前半無表情過ぎるのが気になったが、2時間強の体当たりアクションを演じ切る頃には艶と貫禄が出て、製作の可能性大と言われる続篇にも期待が持てる。」と書いている。私はこの評価に全面的に同意したい。

■□■本作は「殺し屋になりたいと思う人の物語」！？■□■

キネマ旬報9月号における本作の特集の中の「Interview」で、レン・ワイズマン監督は、「これは殺し屋になりたいと思う人の物語だ」とのタイトルで、「脚本で最も気に入ったのは、この物語がジョン・ウィックと正反対だったところなんだ。ジョン・ウィックはある意味で殺し屋という仕事から離れようとしている。それに対して本作は、殺し屋になる決意をする人物の物語だ。そこに惹かれたんだよ。」と語っている。またそこでは、「この映画の主人公イヴには、殺し屋になる二つの理由がある。一つは復讐で、もう一つは父親代わりの人物との絆だ。」とも語っている。

たしかに、『ジョン・ウィック』（第1作）（14年）は、妻との結婚をきっかけに引退した伝説の殺し屋ジョン・ウィックが、最愛の妻の遺した子犬を車目当てのロシアン・マフィアに殺されてしまったことを契機として裏社会に舞い戻り、たったひとりで組織への復讐に立ち上がる物語だった。それに対して、本作は少女時代に父親を殺されたイヴが暗殺者として成長する中、父親の仇討ちのために立ち上がり、ある組織をトコトン追い詰めていく物語だから、ジョン・ウィックとイヴの暗殺者としての共通点は、復讐だ。

「復讐もの」の傑作は数多いが、殺し屋から離れようとしたジョン・ウィックに対して、殺し屋になろうとして、「ルスカ・ロマ」の中で努力を重ね、「デビュー戦」を経た後、父親の仇討ちのため、单身プラハのコンチネンタル・ホテルに向かった“美しき殺し屋イヴ”の復讐は如何に？

■□■体術と拳銃は？美貌は？ファッションは？知恵は？■□■

映画の歴史は長いから、その歴史の中で既にさまざまな「殺し屋伝説」が生まれている。そんな中で、『ジョン・ウィック』シリーズが大成功したのは、ジョン・ウィックが身につけた「ガンフー」と呼ばれる技の切れ味をスクリーン上でトコトン見せつけたためだ。したがって、彼と同じように「ルスカ・ロマ」の中で幼い頃から殺し屋としての厳しい訓練を受けてきたイヴが、父親の仇討ちのため単身で巨大な組織を敵に回すについては、イヴの体術と剣銃使いのキレが最大のポイントになる。私が思うに、そんな役に最適な女優はアメリカならアンジェリーナ・ジョリーやユマ・サーマン、ミラ・ジョヴォヴィッチ、日本なら志穂美悦子、中国ならルーシー・リュー等々だ。しかして、彼女たちと対比しての

本作の女優アナ・デ・アルマスは？前述のキネマ旬報 9 月号における江戸木純氏の評価のように、イヴは「ちょっと線が細い」が、訓練中にその弱点を認識した上で巧みにそれを補う技術を身につけたようだから、本作ではそれに注目！

他方、同じ「殺し屋」でも「美しき殺し屋」になるためには、当然美貌が不可欠。これは実戦のためではなく、映画のためだけの要請だが、その点はとりわけ男性客を喜ばせるためには不可欠だ。しかして、女優、アナ・デ・アルマスの美貌は？ファッションは？また、殺し屋には「体力重視派」と「知力重視派」がいるが、ちょっと線が細いイヴは当然後者だ。大きくスリットの入った黒のロングドレス姿でド派手に立ち回るイヴの殺し屋としてのデビュー戦を私は大いに楽しんだが、その後父親の仇討ちのための手がかりを得るため、単身でコンチネンタル・ホテルのウィンストン（イアン・マクシェーン）を訪れた彼女の知恵も立派なものだ。同ホテルを舞台とする賞金首となった教団の一人、ダニエル・パイン（ノーマン・リーダス）とその一人娘エラを巡る殺し合い風景は、『ジョン・ウィック』シリーズの「スピンオフ作品」らしく凄まじいものだが、そこでのイヴはあくまで傍観者。したがって、イヴの「戦闘力」が発揮されるのは、教団との戦いに備えて銃器店を訪れたイヴが教団の刺客に襲われるシークエンスからになるので、それに注目！そこではイヴは殺し屋らしく、黒のスーツ、黒のコート姿だが、その奮闘ぶりは如何に？

■□■ “主宰” とご対面！ 壮絶な大戦争が勃発！ ■□■

イヴの父親を殺したのは教団を率いる主宰ウィンストン。その理由は、ルスカ・ロマを離れて教団に身を寄せた父親が、イヴを守るために教団を抜けようとしたためだ。単身ブラハに向かったイヴが悪戦苦闘を経て、オーストリア山麓の町、ハルシュタット近辺の教団の拠点にたどり着いたところから、本作のクライマックスとなるイヴ VS 教団（主宰）の大戦争になるので、それに注目！当然そこでは、総合的に勝る教団（＝主宰）が有利、イヴは不利と思われたが、主宰がルスカ・ロマのディレクター（アンジェリカ・ヒューストン）に「何世紀も続く休戦協定が破られた。手を引かせなければ戦争になる」と告げたにもかかわらず、ディレクターが動じることなく「事態の收拾をつけられる人物を送る」と応え、現実には“伝説の殺し屋”ジョン・ウィックを送りつけたところから、事態は思わぬ展開に！

教団の拠点はすべての住民が教団から殺しの教育を受けた暗殺村だから、イヴは街中の人間と死闘を繰り広げたが、その甲斐もなく捕獲されてしまったから、やっぱり万事休す。一瞬そう思ったが、そこにジョン・ウィックが登場してくると・・・？

■□■ 火炎放射器アクションに注目！ ■□■

2025 年 8 / 29 付朝日新聞夕刊は、本作に主演した女優アナ・デ・アルマスを大きく特集し、そのアクションの素晴らしさを詳しく紹介した。そこでは、「極めつきは火炎放射器。アルプスの山と湖に面した世界遺産の村ハルシュタット（オーストリア）の美しい雪景色と強烈なコントラストをなす、炎と炎のバトル。」と紹介した上、「本物の炎です。顔に来

る熱気がすごいし、反動で体が後ろに持っていかれる。練習で初めて炎を人に向けた時は、怖くてショックで泣いてしまいました。でもあの炎はイヴの心。村で自分について衝撃的な真実を知り、怒りが限界点を越え憤怒が噴き出すんです」とアナ・デ・アルマスの言葉を紹介している。なるほど、なるほど。そんな火炎放射器アクションは、あなた自身の目でしっかりと。この「火炎放射器アクション」について、キネマ旬報9月号の特集で前記、江戸木純氏は「これまでも火炎放射器を使用したアクションは数々あるが、派手さも執拗さも間違いなく映画史上最高最大だろう。」と持ち上げている。私もそのこと自体に異議を唱えるつもりはないが、団塊世代の日本人である私は、火炎放射器の炎を見ると、南方作戦従事中の日本軍や、沖縄戦でガマの中に逃げ惑う住民たちに対して、アメリカ軍が容赦なく火炎放射器を注ぎ込む映画の映像やニュースの映像を思い出してしまう。そのため、そんな殺人兵器をエンタメ作品のアクションのツールとして自慢げに使うことには大きな疑問もある。

他方、私が注目したのは、彼女の日本刀アクションだ。日本刀アクションといえばエンティン・タランティーノ監督の『キル・ビル』(Vol.1:03年、Vol.2:04年)、『シネマ3』131頁、『シネマ4』164頁)に主演したユマ・サーマンのそれが有名だが、さてアナ・デ・アルマスの日本刀アクションはそれにどこまで迫っているの？

キューバ出身のアナ・デ・アルマスはハリウッドでキャリアを積み重ね、アクション大作の主演を勝ち取ったそうだが、そんな彼女は新聞のインタビューで、「ラテンの女性は情熱的でセクシー」というステレオタイプと常に戦ってきました。そんな枠に押し込めるのは間違っている！と自分で証明できるのは楽しい。でもキューバ人として生まれた自分を隠すつもりもない。自然体でいたいですね。」と語っているが、私にはその趣旨はわかりにくい。アンジェリーナ・ジョリーやユマ・サーマン、ミラ・ジョヴォヴィッチ等々のアクション女優は一目でその顔とアクションを覚えたが、本作のアナ・デ・アルマスは鑑賞後も残念ながら、名前も顔もはっきり思い出せないから、やっぱりアクション女優としての総合力はイマイチ・・・？それでも『ジョン・ウィック』のスピノフ作品として、アナ・デ・アルマス主演の次回作を期待！

2025 (令和7) 年9月3日記